「爽」

河嶌レイ

今回のりこりすのテーマは「爽」。ちなみに昨年のテーマは「雨」でした。今年はその少し前の爽やかな季節の薔薇たちをお伝えしたくて…。いかがでしたか？みなさんにも５月の薔薇たちの瑞々しさが伝わったでしょうか？全国各地にいらっしゃるみなさんのところにもうつくしい薔薇たちが咲き誇りますように。それでは次回のりこりすもお楽しみに。

生徒会メンバー
黒薔薇姉妹　３年生：河嶌レイ　／２年生：月丘ナイル／１年生：小春まりか
青薔薇姉妹　３年生：千原こはぎ／２年生：田邊葉月　／１年生：黒猫。
姫薔薇姉妹　３年生：新名リオ　／２年生：星乃咲月　／１年生：藤崎しづく

RKRS 私立タイムライン学園生徒会会報
http://rkrs.is-mine.net/

RKRS 私立タイムライン学園生徒会会報 第五号
発行：2015.05.18
寄稿：
河嶌レイ (@ray_kwsm) ／千原こはぎ (@kohagi_tw) ／新名リオ (@urufffayn)
月丘ナイル (@nyle_222) ／小春まりか (@asami121223)
田邊葉月 (@hazuki1815) ／黒猫。(@2nd_M_Stars)
星乃咲月 (@kirarauta) ／藤崎しづく (@siduku_xxx)
Design & Illustration：千原こはぎ

「木漏れ日の午後」

姫薔薇姉妹　Words by 新名リオ

姫薔薇の呼ばれる前から、学園のこの場所が好きだった。ひオは噴水を見上げる。薔薇の顔からいてきた子猫は、水の光にじゃれている。お気に入りの白いインナーは光落ちた。きっとは本を閉じ、じっくはレースを編んでいた。しかしこのひかりの伏せられまつげは、物語の一時停止を示している。細やかな白をつぶらなくりっとりオは真をかしげた。足にすりつく姫薔薇姉妹。なにかを思い出したようになってリオは中で寄り添う姫薔薇姉妹。リオはくすくすと笑う。ページをめくりこのきが目を覚ますと、リオの肩にもたれていた。眠そうな声のままで挨拶をする。薔薇の顔でほこんな姿を見せないのに。リオはくすっと笑う。やっぱりオを開くと、レースのリボンが挟まれていた。お姉さまにとりあげたくて、ページをくはリオを向いて子猫をなでる。あのがとって、じっくと。ほのかに染まった頬をつぎの頬をつぎが優しくみつめる。風がさあっと吹いて、リボンが舞ってるえた。子猫があくびをする。物語がたいに時間は巻き戻せない。そうか、だからページはつむがれて、木漏れ日は美しい。

姫薔薇姉妹

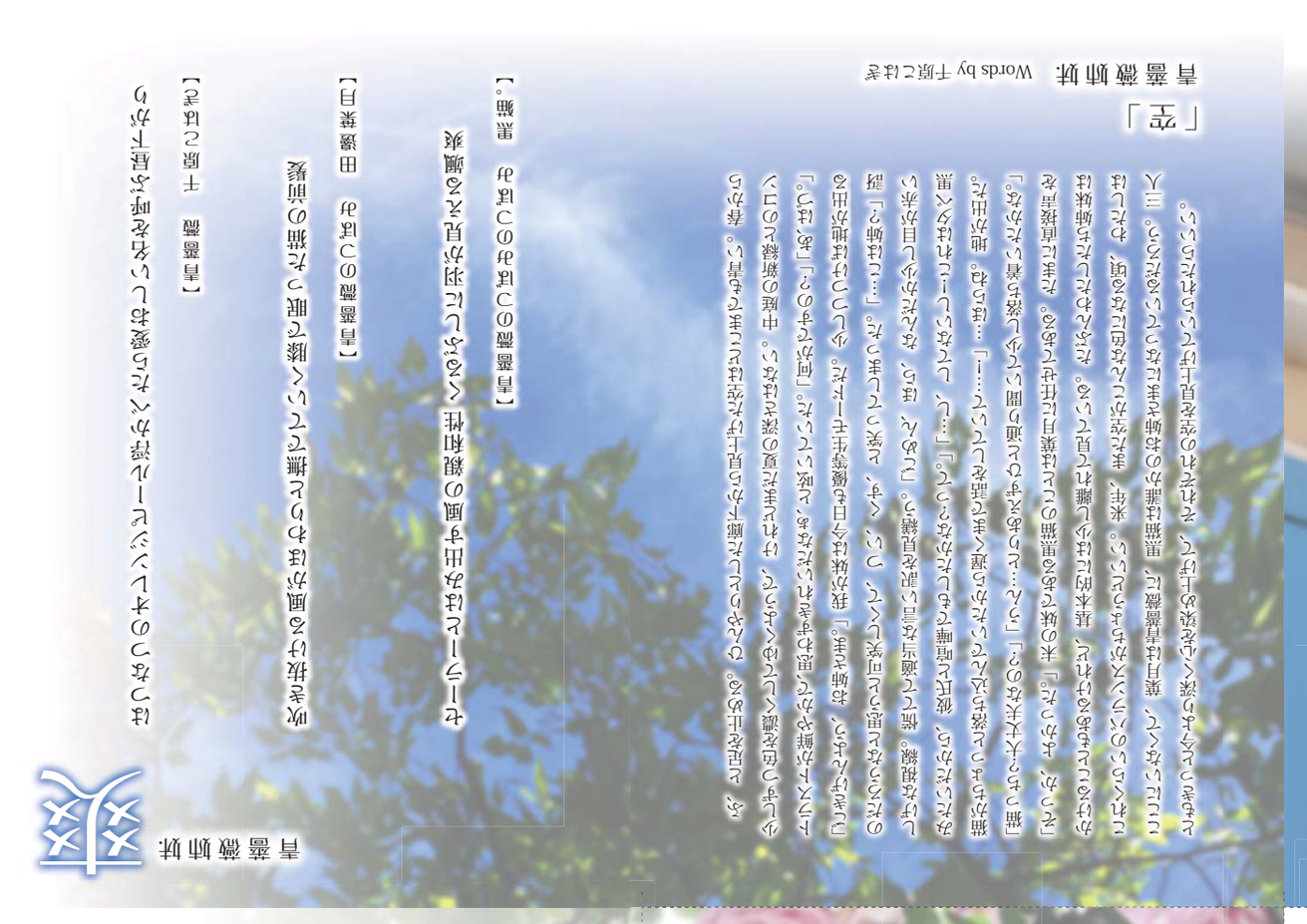
半袖に風が生まれてのひざせばかるみる船に乗わる屋上

【姫薔薇　新名リオ】

真っ白な球のようにはつなつの風にはためく君を掴んで

もう目だけにも飽きてしろたえの制服で買うアイスクリーム

【姫薔薇のつぼみの　星乃咲月】



「風薫る」

黒薔薇姉妹　Words by 河嶌レイ

学園にも軽やかな風が吹きぬけるようになってきた。もう5月なんだね。青い空は少し苦手。わたしの胸の奥まで通り抜けていきそうだから。なんだかくすぐったいし、後ろめたい気もする。ちょっとあっけらかんとし過ぎている気がするからかな。あんな風に吹かれたら踊り場や体育館の裏でなんて悪いことできないもの。

窓の外に見える薔薇園にもたくさんの薔薇が咲きはじめた。赤やピンク、黄色や白も。どれもきれいでかわいくて。見ているだけでうっとりする。ついこの間まで緑の葉っぱばかりでつまんなかったのにね。そのときが来ればつぼみになって花が咲く。まるでこの学園の女の子たちみたいだ。入学したてはきょろきょろしていてまるで落ち着かない1年生も、いつかは青薔薇や姫薔薇のようになるんだから、女の子というのは本当に不思議な生き物だ。

さあ、そろそろ生徒会室に行かなくちゃ。青薔薇・姫薔薇がお待ちかねだからね。今日は青薔薇主催のティー・パーティ。えーと…何を持っていけばいいんだっけ？クッキーは2年生のあの子に用意してもらったし、カップケーキは1年生のあの子に。これで…十分かな？さてさて、参りますかね。

「空」

青薔薇姉妹　Words by 千原こはぎ

はつなつのオレンジぃっぱいに浮かんだ白い名を呼ばれる昼下がり

【青薔薇　千原こはぎ】

吹き抜ける風がはずれと撫でていく陽で眠った猫の前髪

【青薔薇のつぼみ　田邊葉月】

セーラーとはみ出す風の親和性　くるぶしに羽が見える鎖骨

【青薔薇のつぼみのつぼみ　黒猫。】

ぐ。と足を止める。ひとりぼっちだった廊下から見上げた空はどこまでも青い。春から少しずつ色を濃くしてゆくようで。けれどまだ夏の深さまではない。中庭の新緑とのコントラストが鮮やかで、思わずまぶしいなぁ、と呟いていた。「何かいけない地が出るぞ。ごきげんよう、お姉さま。」我が妹はいつだって、ひと言でいけない。今日も優等生モードだ。「あ、はい。」ふざけるなと思って可笑しくて、ひと言、すっと、と笑ってしまった。「…ここは姉の。」訝しげな視線。慌てて適当な言い訳を見繕う。「ごめん、なんだか少し目が赤いかたいだから。彼氏と喧嘩でもしたかなって。」「…こ、してないしーこれはタイ黒猫がちょっと落ち込んでいたから遅くまで話をしていて…」…ほらね。地が出た。「猫ってかなり…っていうかもうちょっと通り抜けていきそうだから。」「…ほら、ってなんだ。」「ってなんだ。」「そう、よかった。」本の妹である黒猫のことは葉月に任せてある。たまには直接会ってこいだ。葉月は青薔薇で、黒猫は誰かのお姉さまになっているだろう。三人でいこうぜ。心を染め上げて、それぞれの空を見上げていられないい。